

聖書研究祈祷会

題：「目を上げて天の都を見よ」

聖書：詩編 121：1～2

2025/10/15

奨励：松並徹治

皆様おはようございます。

今朝は、詩編 121 編の 1～2 節の御言葉に耳を傾けてまいりましょう。

皆さん、ちょっと想像してみてください。イスラエルの人々が、家族や仲間と一緒にエルサレムを目指して歩いている姿を。年に三度大きな祭りのとき、人々は家を出て、何日もかけて山道を歩きます。子供もお年寄りも一緒です。足は疲れるし、道には危険もあります。でも、その旅は喜びの旅でした。なぜなら、目指す先に神殿があるからです。神様が住んでおられるところに行ける。その期待があるから、人々は歌いながら歩き続けました。その歌こそ、「都上りの歌」と呼ばれる詩編の数々です。その中の一つが今朝の 121 編なんです。

1, 都上りについて

この詩編 121 編は 120 編から 134 編まで続く「都上りの歌」の一つです。イスラエルの民は律法によって、年に三度、主の祭りの時にエルサレムへ上るように定められていました。申命記 16:16 に記されている、**種なしパンの祭り**（過ぎ越しの祭り）、**七週の祭り**（五旬節）、**仮庵の祭り**のことです。

ここで上ると言う表現は、エルサレムが海拔およそ 750m の高地に位置し、周囲の低地や荒野から見ても、必ず上って行くことになるからです。当時の人々は、住んでいる場所から数日、時には数週間もかけて歩きました。北のガリラヤからであれば、ヨルダン川沿いを下り、荒野を越えて、エルサレムへ向かいました。南から来る人々はベツレヘムやヘブロンを通して坂道を登って行きました。

また、信仰的にも主の前に出ることは、心を高く上げることでした。旅人にとって都上りは神に会うためであり、神の民としての喜びの確認でした。そして何よりも神様を礼拝するための旅だったんです。

2, 旅人が見上げた山

エルサレムは山の上に建てられていました。都上りをする旅人たちが遠くから目を上げるとき、まず目に入るのは山々でした。その中でひとときわ高くそびえるモリヤの山。そこに神殿が建てられていたのです。そしてこのモリヤの山は「シオンの丘」とも呼ばれました。もともとはダビデが占領した砦の名でしたが、やがて「神の住まわれる都」を象徴する名前となり、神殿の山そのものが「シオン」と呼ばれるようになったのです。ですから旅人が目を上げて仰ぎ見たのは、モリヤの山であり、同時に「シオンの山」でもありました。

このモリヤの山には深い歴史があります。創世記 22 章で、アブラハムが最愛の息子イサクを生贄として奉げるようとしたましたが、神はそれを止め、代わりに一匹の雄羊を備えてくださいました。そこから「主の山には備えがある」と言われるようになりました。その山に、のちにソロモンが神殿を建て、イスラエルの礼拝の中心として据えられたのです。旅人が目を上げて見たのは、まさに「主の山に備えあり」という信仰の歴史の山であり、神の臨在のしるしとしての神殿でした。

3, 助はどこからくるのか

山に向かって目を上げた旅人は、ただ山の美しさを見たものではありません。自分の助けがどこから来るのかを思い起こすために目を上げたのです。「私の助はどこから来るのか。」それはただの問いかけではなく、信仰の告白につながる問でした。そして旅人は答えます。「私の助は主から来る。天地を造られたお方から。」山そのものが助けを与えるものではありません。シオンの丘も神殿という建物そのものも、最終的な助けではありません。助は天地を造られた主から来るのです。主はイスラエルを導かれた神、アブラハムに備えを示された神、出エジプトの時に道を開かれた神その神こそが真の助け主です。

また、旅人たちが経験した様々な危険や困難、野獣や盗賊、病気や事故、これらすべては神様の御手に中にありました。そのすべてを支配しておられる神様が、ご自分を求める者たちの助けなのです。

4, 現在の都上り

私たちがこの地上で信仰の旅路を歩むとき、心に留めておきたいのは。「終わりに日」に私たちが到着する目的地です。それは、天のエルサレム、新しい都です。ヨハネの黙示録 21 章に、はっきりと希望の都の姿が記されています。

21:1 また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとから、天から降って来るのを見た。

21:4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

そしてこの都には、神の栄光が満ちており、もはや太陽も月も必要とはしません。主ご自身がその光だからです。門は常に開かれ、民が大群をなしてそこに入ってくるのです。そこにはいのちの水の川が流れ、十二の実をならせるいのちの木があって、その葉は諸国の民を癒す（黙示録 22: 1 ～2）とあります。

この都には、私たちの涙を拭ってくださる神がともに住まわれます。そして、永遠に御顔を仰ぎ見て、ほめたたえる場所、それが新しいエルサレムなのです。

この都を仰ぎ見るとき、私たちは現実の苦しみの中でも、希望を失わずに歩むことができます。たとえ涙の谷を通っても、その涙を喜びの泉に変えてくださる神が、私たちとともにおられるからです。

聖書は、やがて訪れる終わりの日、すべての涙が拭い取られる世界が来ると語っています。そこにはもはや、死も悲しみも、嘆きも苦しみもありません。神が人とともに住まれ、すべてのことを新しくされるのです。

そしてその都には、神の栄光が輝いています。昼も夜も、太陽も月もいりません。なぜなら、主ご自身がその光となっておられるからです。（黙示録 21:23）この都こそ、私たちが最終的に目を上げて仰ぎ見る目的地なのです。

結び

人生という旅は、ときに長く、厳しいものです。

でも、あなたが目を上げるなら、そこに神の御顔があり、神の助けの御手があります。主は今も、あなたを見ておられます。

あなたの涙を知っておられます。そしてそのすべてを超えて、天のエルサレムへと導いてくださるのです。

今、あなたの目はどこを見ているのでしょうか？

足元の問題ばかりを見ていませんか？恐れ、失望、現実の重み。そうしたものが私たちの視線を下げさせようとします。しかし、神の言葉は、今日もあなたに語ります。「目を上げよ」と。神を仰ぎ見るとき、助けが来ます。癒しが来ます。希望が戻ってきます。そして、どんなに嵐の中にあっても、私たちはしっかりと前に進んでいけるのです。

あなたはいま、何を見つめて生きていますか？

過去の失敗ですか？ 将来への不安ですか？

それとも、自分にはもう無理だと決めつけてしまった現実でしょうか？

どうか、うつむくのをやめてください。

足元ばかり見ていては、神の栄光は見えません。

いまこそ、目を上げましょう。

あなたの助けは、あなた自身からではなく、

天と地を造られた主から来るのです。

天地を造られた主が、あなたの助けとなってくくださる。その約束を、あなたは信じていますか？

あなたの視線を、もう一度、神へと向けてみませんか？

目を上げて天の都を見ましょう。そこに、真の助け主がおえられるのです。